

午前の死

三紀村 艸

《光と影の記憶》

二十三歳の僕は、五十歳の男のように未来を見切っていた。

乾いた意識は、生きることにはなにほどのこともないと告げてはいたが、炎天下の夏の暑さがあきらめ静まり返って平衡を保っている僕の精神を、次第に攪拌し苛立たせた。

突き上げるような衝動を身体の内面で予感するが、それは予感のまま線香花火のように消え去る。

狂気は、ときおり、なんの前触れもなく姿を現わし、脳髓から跳び出そつと屈伸をしていたが、日常の空気を吸い込むたびに圧しつぶされ、退却した。

突堤はどこまでも続いているように思われた。

空から間断なく降りしきる光は、海面との狭間で乱反射し、そのため沖は白光を放って見えなかった。

風はなく、海は平静をよそおっている。

雲は水平線の上でうなだれ、押し黙っていた。

時間は、いつか停止していて、動き出すそぶりもなかった。

突堤の先端まで歩く。子供がひとり釣り糸を垂れている。

「なにか、釣れるのかい？」

小さな丸まった背中に声をかけ、下をのぞき込む。

「餌がついていないよ」

振り返り白い歯を見せて男の子が笑う。

僕は曖昧な笑みを浮かべ、細い肩に手を置いた。

「お兄ちゃん、どこから来たの？」

「うん？ 海の方さうだよ。ほら、つつすらと陸地が見えるだろ、あそこにある街から来

「ただよ」

「ふん。人がたくさん住んでいるところだよ」

「ああ、男も女もいっぱいいて、みんなお面をかぶって歩いている」

「お面？ アハハハッ」

小学校四年になる男の子は、身体をよじらせて笑った。

沈んだ糸の先は見えない。波が小さく砕け、白い泡が咲いて崩れた。

太陽が、白色から赤に変わっていく。やがて、ただれて、雲間に隠れた。

民宿の二階の部屋に戻ると、仰向けに寝転がった。隣の部屋から高校野球の試合が終わったのか、サイレンの音が高く押し出すように鳴りひびき、やがて獣の低いうなりに変わると、静まった。けばだった畳の上で、火照った身体を持って余し、「ごろりと一回転させる。両手両足を大きくひろげて大の字になる。眼を閉じると、突堤で釣り糸を垂れている男の子の姿が浮かんだ。

陽が落ち、薄暗くなった部屋の明かりを点ける。階下で人の声がする。突如女の悲鳴があがり、「早く救急車を呼べ！」と男の殺気だった声が聞こえた。なにごとかと階段を駆け降りる。主人夫婦が走り出していた。

「大変だ！ 子供が海に落ちた！」

老人が叫ぶ。僕は下駄をつっかけ玄関を走り出る。

波の音が聞こえる……砂浜に打ちあげられた無数の藻……粘りつく風。

暗闇の向こうから次々と押し寄せる波……砂浜でしぶきをあげ、その勢いで競りあがる海水。

黒く固まった人の群れ……子供の名前を呼び続ける母親の声。

立ちあがった黒い人の群れは、小さな身体を担くと石段を上がって行く。

救急車のサイレンの音……点滅し独楽のように回転する赤い炎。

《窓もない暗い六畳一間の長屋で、母と僕、そして入退院を繰り返す父、家族三人は川の水になって、昼を過ぎても薄い敷き布団に横たわっていた。暑苦しさは感じなかった。そんなエネルギーもなかった。丸一日半なにも食べていなかった。僕は起きあがり台所の水を飲むと外へ出た。隣の家の前の朝顔が、紫色の花を咲かせている。太陽は中天にあり、降りそそぐ灼熱の光は肌にしみ入り、じわっと干からびた内臓を熱した。視神経は麻痺して、眼に映る建物や大人たちは、陽炎のように揺らめいて見えた。汗は吹き出す、油のよ

うなものがぬらぬらと皮膚の上を覆っていた。僕は日盛りのなかを歩く。暑さが気持ちよかった。いや暑さを感じているのではない、頭の芯がぼうつとして気持ちよいのだ。大きな屋敷の白い壁に背をもたせ座り込む。脂汗が流れてきた。空を見あげた。真っ青な空。そして、意識が遠のいていった。

僕は赤い電球の下で横たわっていた。眼を開けると、大人たちが僕の顔をのぞき込んでいる。「可哀想に……」誰か女の人が言った。親戚のおばさんだ。空腹のため手がぶるぶると震え、歯がガチガチと鳴った。眼の前の温かい茶碗の飯を、震えながら呑み込んだ。「僕は死んでいたんだね」おばさんに言った。おばさんは涙を流しながら顔を左右に振り続けていた》

風が強かった。

砂塵が舞いあがり、散弾のように僕の顔を打つ。

透きとおった大気のため、はるか陸地を見通せた。その陸地を背景に、白いフェリーボートが現われる。陽を浴びてきらめく船体は、次第に大きさを増し、やがて、埠頭に接岸した。

海面が泡立ち、ひときわ高く汽笛が鳴る。白い航路を生み出しながら、フェリーボートは埠頭から遠ざかる。

七日間の夏休みのうち、五日間を小さな島でひとり過ごした僕は、また街に戻る。

*

光が錯乱していた。影は僕の足元で踊り狂っている。喉が渇き、僕は野犬のように舌を突き出して歩く。信号機の黄色がせわしげに瞬きを繰り返す。その黄色に向かって僕は全速力で走り出す。眼の中で光がはじけ、一瞬前方が闇になる。肩で大きく息をする。光は静まったが、空気はじりじりと僕の腕や顔を熱する。

扉を開ける。吊り下げられた鐘が鳴る。

ウエートレスが近づいてくる。白いミニスカート。目尻に皺を寄せている。

アイスコーヒーに氷が融け、汚らしく薄茶色になった中に数個の小さな欠片が浮き沈みしている。僕は唇を突き出し、ストローをくわえて吸う。グラスの底に、四個の透明な欠片が身を寄せ合ってしんとしている。

カタカタ鳴るクーラーの音。窓からの光が二の腕を焦がす。煙草を吸う。紫煙はゆらゆらと僕の頭上を越え、背後へ流れる。首をめぐらして周囲を見る。静物画のように貼り付いたウエートレスと客たち。固まっている。

扉ちかくのテーブルに、文庫本を片手に頭をかしげ考え込んでいる髪の長い女の子がいる。製造課の白井まりもだ。僕は立ちあがって行き、彼女の手から文庫本を取りあげた。

「哲学ノート、三木清？」

驚いたまりもが僕をにらみつける。大きな瞳に強い光がみなぎり、立ちあがるなり僕の手から文庫本をひつたくると腰を揺らしてレジへ行った。

「ねえ、難しい本を読んでいるんだね」

まりもの背中がこわばり、そびやかした肩に力が入っている。腰まである長い髪が、歩調と呼応して揺れている。まるで巫女のような。

「失礼な人ねッ、あなたは」

「白井まりも。北海道の生まれかい？」

まりもが失笑する。八重歯がキラリと光る。

高台にある公園は街を見渡せた。

ベンチに座った僕とまりもの間に、彼女の大きな紙袋が境界線のように立ちはだかっている。霞んだ高層ビルの上に、入道雲が光をはらんでため息をついている。まりもは両手を膝の上に置き、澄んだ眼差しで一点を見つめている。

沈黙がひろがる。だが、居心地の悪い沈黙ではない。僕は白井まりもの横顔を見つめ、彼女は僕と同じ種類に属する人間だと悟った。突然、まりもが振り向き、僕の眼の奥をのぞき込んで、困ったように笑った。

K 駅のホームは七時から三十分、電車が停まるたびに若い男女であふれかえった。狭い階段は人で埋まり、木造の駅舎は傾いたように見える。がらんとした商店街を通り抜け、国道を渡る数百人の群れは、長蛇の列となって歩き続ける。原色の派手な衣服は乳白色の風景のなかで、場違いなほどに鮮やかだ。

僕はS電機のテレビ製造工場の資材課で働いている。工場へは電車に乗らず、毎朝六時に起き、十キロの距離を一時間かけて走って通っている。一、二、三、一、二、三。と小さく二回息を吸って大きく吐き、そのリズムで身体を前屈みに前へ前へと進む。下半身から立ち昇ってくる疲労は身体の隅々にまで浸透していくが、ある一定時間が過ぎると、霧

が晴れたように身体が軽くなる。僕はなにも考えずにただっ広い国道をひた走りに走る。そして国道から市道に入り右へ曲がると、畑の真ん中に白い建物が三棟、朝日を浴びてきらきらと輝いている。

製造棟の一部は工事中のため白いテントシートで覆われている。トタン屋根の手狭な簡易の更衣室は、ごったがえす人の甲高い声で騒がしい。八時になると、各棟の壁面に取り付けられたスピーカーからラジオ体操の音楽が流れ出す。慌てて更衣室を出る作業員たち。五百人が軟体動物のように身体をくねらせ、青い空の下で飛び跳ね、汗が飛び散り、灰色の作業服から白い腹が覗く。

体操が終わると各班ごとに朝礼が行なわれる。黒いアスファルトの道から立ち昇る熱気、休めの足を右に左に置き換え、うつむいたり空を見あげたり、小さくため息をついて班長の話が終わるのを待つ。暑さにうんざりしている班員たちを尻目に、班長はますます声を張りあげ訓辞を述べる。解散の号令とともにぞろぞろと各自の持ち場につく。始業のサイレンが鳴り、リフトがゆっくりと二階の製造課へS字型を描いて昇っていく。僕ら資材課は出庫の準備をし、テレビの各部品をリフトに乗せ、基盤などの重量あるものはベルトコンベアと昇降機を使って上に上げるのだ。

午前の作業の終了を告げるサイレンの音で、三百人を収容できる食堂はまたたくまにいつぱいになる。食事を終えると、次々とL字型に並んだ三棟の工場の前の運動場に人が集まり、ソフトボールやバレーボールが始まる。

運動場の端、金網に沿って作られた熱い芝生の上で、半袖を肩口までまくりあげ煙草を吸っている三人の長髪の男たちが、背中にびっしりと汗をにじませ懸命にボールを追っかけている女たちをからかっている。

資材課の薄暗い部品置場の真ん中を走っているベルトコンベアの上では、丸太のように縦に並んで三、四人の男たちが昼寝をしている。夏はひんやりして気持ちがいいのだ。午後の始業のサイレンが鳴っても、気持ちよさのあまり熟睡して起き出さない者がいる。小太りの赤ら顔の班長は、舌打ちしてベルトコンベアのスイッチを押す。突然動き出したベルトに驚き、慌てた作業員たちは転がるようにコンクリートの床の上に降り立つ。その滑稽な格好を見て、班長はさも愉快そうに腹を抱えて笑うのだった。

四百人中三百人が女性を占める製造課の平均年齢は十九歳である。そのなかには十六歳で同棲しているというませた少女もいた。

二十一歳の白井まりもは、十数本ある製造ラインのひとつをまかされている。部品の不

足、休暇者の代替要員の確保など、ラインを止めることなくスムーズに流れるよう管理をするのだ。

食堂でまりもを見かけた。背中を丸め、下を向いて歩いている。僕は近寄っていき、彼女の肩を叩いた。

その日の夜、僕は丁駅から吐き出され吞まれる大量の乗降客に注意を払いながら、彼女を待った。まりもは、きっちり三十分遅れて改札口に姿を現わした。

「哲学ノート、読んでるかい？」

まりもはハイヒールの爪先で小石を蹴りながらつなずく。生暖かい風が、ビルのネオンを映した川面に吹きつけると、暗いしじまのなかでほのかに化粧の香りがした。

「わたしのお父さん、小説家なの。売れない小説家」

「へえ、カッコいいじゃない」

「ちつとも、貧乏暮らして母さん年中ぼやいているわ」

石段を上がって道路へ出る。信号が赤から青に変わり、一斉に車がエンジンをふかす。

丸い光の輪が次々とまりもの白い顔を浮かびあがらせ、やがて闇に沈む。

空は奇妙に明るく白く横たわっていた。まりもは絡めていた腕を離し、少し遅れて歩いてくる。立ち止まり振り返ると、まりもは敷石の線の上を伝うように歩き、両腕を広げてバランスをとっている。線からはみだして、まりもは笑いながら走ってくる。ハイヒールの音がビルの谷間に響いてこだまする。

僕は初めて他人を、ひとりの女を好きになれるかも知れないと思った。

*

街のさまざまな片隅では言葉が立ち竦んでいた。失意や希望が風に吹かれ、街角に転がり込んでとどろを巻いている。陽が落ちて夜がやってくると、ネオンに引き寄せられた冗舌が鎌首をもたげる。

歩道橋の上から見る銀杏並木は、黒々と重たい。螺旋階段を降りる。運動靴がキュツと鳴る。

僕は半年ぶりに定時制高校時代の友人らがたむろする喫茶店に行った。

薄暗い店内の片隅に男と女が五人。コーヒークップの固い響き。

「時間と空間は絶対的なものではなく、相対的なものなんだ。空間がなければ、時間もな

い」と男Aがアインシュタインを真似て言った。

「時間など存在しない。太陽が昇り沈むだけさ」男Bが言う。

「時間がなければ、老化もしないのかしら？」

うつむいていた女Cが顔を上げた。

「始めも終わりもない。ただ、現在が死滅していくだけさ」男Dがぶっきらぼうに言った。

「でも、時間がないと進化はどうやって説明するの？」

女Eのハスキーな声を聞きながら、僕は独り硝子の向こうの街並みを見ていた。

物体が影絵のように音もなくうごめいている。老人が歩いている。子供が転ぶ。女が立ち止まる。疾走する車。くつきりと夜空に浮かぶ信号。赤、黄、緑。

もう一人の僕が、老成した顔で窓の外からのぞき見をしている。知ったふうなことを言う若造ども。独りでいるより、仲間といたほうが楽しい？ それは自分を見つめなくてはむからだ。時間は存在しない？ そうではないだろう。時間は外部にあるのではなく、自己の体内にあるのだ。

突然、笑い声があがった。暇なのだろう、マスターが横に立っていた。ビールが運ばれてくる。三本、四本、小さなテーブルがいっぱいになる。空き瓶が増えるにつれ、頭の中がもやってくる。くるくると空回りするフィルム。絞られた光源が白い布の上で丸い輪を浮かびあがらせる。その輪の中から三年前の二十歳の僕が近づいてくる。

不況のまっただなか、慌ただしく行き交う勤め人たちの疲れの混じった険しい表情を一瞥しながら、僕は数枚の履歴書を持ってビルからビルへと渡り歩いた。が、治りかけていた吃音障害がぶり返し、ほとんどの面接は短時間に終わった。

対人関係恐怖症、他人の感情の動きに対して病的なほど敏感になり、相手の顔色ばかりを見ていた。極度の緊張症は、見知らぬ他人や複数の人間の前では全身が小刻みに震え、唾液は干上がり、上唇の裏側の粘膜と歯茎がひっついた。口を大きく開けられず、しゃべるたびに粘膜のはがれる嫌な音がした。息苦しさで呼吸困難におちいり、せいぜいと肩で息をした。しゃべろうとすればするほど言葉はつかえ口こもった。手足から汗がじつとりにじみ出し、ぬるぬると気持ち悪かった。

発語する意欲をなくし、僕は次第にしゃべることを放棄していった。口を閉ざし無理に話すことをしなくなっただけから、僕は閑達になった。風景として見る人間たちは、やさしく善意に満ち満ちていた。僕の頭蓋骨のなかでは、閉じ込められた言葉が次から次へと生まれ、妄想の世界を構築していった。

精神とはなんと不思議だろう。大脳のなかで織りなす無数の意識の河。一方が塞き止められると他方へ伸び、そこからさらに新たな支流が発生し、意識はどこまでも増え伸び続ける。その膨大な量の意識の河の流れに僕の鉛のような自我が溺れ、助けを求めて叫んでいる。

《この世のものとは思えない青い空……。十二歳の僕は、あるひとりの少年と護岸工事中の運河にいた。

蛇行しながら運河は遠く細く、霞の彼方へ流れている。野焼きの煙があちこちで狼煙のように挙がる。工事中の急な斜面を滑って降りる。河岸を進むにしたがってコンクリートで固められた道幅は狭くなり、泥の臭いが鼻をついた。積まれた石垣は次第に高く直角にそびえだす。石垣のところどころに排水のための竹筒が埋め込まれてあり、それを足場にしながら石垣をよじ登る。下から押し上げる少年。登りきった僕は道にひざまずいて少年に手を差しさす。見あげる少年の黒い顔に汗が光っている。僕は少年の手を握りしめ引っ張り上げる。が、ふと記憶の底から埃が舞いあがり、僕の眼の前に黄色い畳が忽然と現われた……

庭の見える二階の八畳部屋。僕と母は、再び入院した父の友人が住む大きな屋敷の一室を借り寝泊まりをしていた。僕が十一歳のときだ。その家には僕と同年の男の子がいた。少年と僕は、学校から帰ってくると庭でキャッチボールをしたり、部屋でテレビゲームやトランプをして遊んだ。

少年の母親は、なぜか彼のそばを片時も離れない。まるで僕から災厄のかかるのを防ぐためだと言わんばかりに。そして、その汚らしいものを見るような視線が、ときどき僕の額に突き刺さる。僕は知らん顔をしているが、どうしても身体が震え、赤面してしまふ。子供心にも置かれている状況はわかっていて。次第に卑屈になっていく自分を、僕はつましい小動物を見るような眼で、僕自身を冷酷に観察していた。

十歳のとき、白い壁に背をもたせて気を失った夏の日から、僕は重度の吃音症に陥った。しゃべるとき畳を手の平で叩かなければ最初の言葉が出なかった。それは口を追うことにますます酷くなり、渾身の力を込めて畳を叩いたときだけ言葉を発することが出来た。喉の奥に詰まっている重苦しい空気の蓋を、畳を叩く反動で押し出し、つかえがとれた喉頭から、ようやく言葉を発することが出来るのだ。手の平の痛さと神経的な疲れ、自分でも滑稽だと思いつつ、叩く畳からつつすらと埃が舞い上がるのを眺めていた。

少年は笑いを押し殺し、意地の悪い目付きで僕に話しかけ無理にしゃべらせようとしている。固く口を閉ざした僕の眼の前で、彼は畳を叩き、「アツ、アウツ」と僕の口真似をする。真つ赤になった僕の顔を見て、彼は面白がって何度も繰り返した。横から少年の母親が、「そんなことをしていたら、しまいにあなたも口が利けなくなりますよ」と僕をちらつと蔑むように見て注意した。

『違う！　ぼくは口が利ける。お、思うように言葉が出ないだけだッ』
心のなかで抗議し叫んだそのときから僕は、少年とその母親にもの悲しい憎悪と吐き気のような殺意を覚えたのだった。

『お前なんか、死ぬ！』電撃のような言葉が僕の身体を貫いた。少年の安心しきった顔。僕の手から力が抜ける。五本の指をまつすぐに伸ばした。ぬるっと手が離れていく。瞬間、少年は反り返り頭から落ちていった。埃をかぶったコンクリートの上で彼は一回転すると、濁った河の中へ吸い込まれていった。僕は立ちあがり走った。「お前が悪いんだ！」叫びながらどこまでも走り続けた』

僕は人間との関係を忌み嫌った。関係は物質だけでたくさんだ。他人から遠ざかるにつれて、彼らは僕の視界から消えていったが、日常のなかでは影のように周りをうろついていた。その亡霊が、のっぺらぼうな得体の知れない恐怖そのものとなり、僕は極度の被害妄想に陥った。いつも僕は身構えていた。神経がすり減りたくたになつた。アパートに帰り、僕は嚴重に戸締まりをすると、ほつと独りの喜びを噛み締めた。街へ出るとき、僕はカッターナイフをズボンのポケットに忍ばせた。自分の身は自分で守らなければならぬ。ビルの壁ぎわ、エレベーターの中。敵に背中を向けてはならない。駅では細心の注意を払う。ホームから遠く離れて電車を待つ。

僕の聴覚はどんどん鋭敏になり、針の落ちる音も聞き逃さない。僕はたえず耳を澄ましていた。音はいたるところで、限りなく鼓膜を圧倒した。その強大な音のなかにひそむ小さな音、それが僕を怯えさせる。猿のような僕、したり顔の大人たち。飽き飽きした。たえず意識を張り巡らしている僕自身でさえ僕のことかわからないのに、どうして他人が僕のことを理解できるのだ。

僕は鎧をまとう。筋肉の鎧だ。黙々と一年間バーベルを挙げ続けた。僕は筋肉と無表情の仮面を手に入れた。他人の怒りや悲しみに心を動かさぬこと。共鳴しすぎる僕の神経を太くして響かさぬこと。そして、河原の小石のようにひっそりと転がっているのだ。

京都へ向かう快速電車が走り出した。まりもは身体を固まらせて座っている。見ないでも気配で僕にはわかる。正面を見つめ、自分の思いのなかに降り立ち、ただひたすら一点に凝縮していこうとしているのだ。回転する独楽のように、周りの夾雑物を振り払い、静かに澄んだ真空地点に意識を置こうとしている。

電車が走るにつれ、窓の外の風景は色彩を変えていく。まりもがふっと息を吐く。身体の固さが消え、穏やかな顔で僕の横顔を盗み見、窓の外へ眼をやる。空席だらけの車内には、僕らふたりの呼吸する音だけが規則正しく聞こえてくる。

静まり返った車内、飛び退る木々や建物。どこへ行くのだろう？ とふといぶかしく思った。京都だ、京都へ行くのだった。沈黙が心をなごませる。この静かで穏やかにたゆたっている時間と空間を乗せて、電車は走り続ける。また、どこへ行くのだろうと思った。月に一度、僕とまりもは平日の日に休暇をとって京都に行く。一日かけて寺を見て歩く。まりもには寺が似合っていた。姿かたちが、巫女のような長い髪が、それもあるがまりもの精神のありようが寺に似合っているのだ。長身のためか少し前屈みに修業僧のように歩く。まりもの姿が、風景にまじわり融け込んでいく。糠のような雨、眼を凝らさないと雨は見えない。まりもの黒い髪が雨に濡れて光っている。

「ちよっと、早く歩きすぎだよ」

僕はまりもの髪をつかんで引く張る。まりもは止まらずにずんずん歩く。長い髪が水平になり、僕とまりもの間で帯のように横たわっている。まりもは痛さを期待しているかのようによろめき先を歩き続ける。僕の手にまりもの重さが伝わってくる。黒々とした髪がびしょ濡れと張って、まりもの頭がのけぞる。僕は怖くなって手を離す。まりもは立ち止まり振り返る。眼の白い部分がキラリと光る。

まりもはたいてい伏し目がちだ。強く閉じた唇に、意志の強さをかいま見せる。ときおり、突拍子もなく陽気になり、頬を染め、声が一オクターブほどうわずり冗舌になる。そんなときのまりもは要注意だ。必ずそのあと、反動でかたくななまでに無口になり、最後は帰ると言い出す。まりもの身体の内には躁鬱という病が棲んでいるのだ。自分でもどつすることも出来ないでいる。沈みきって独りでどんどん落ち込んでいく。

まりもはなぜかあまり笑わない。身体全体に漂わせている緊張感が笑いを縛るのか、あ

るいは笑うことで自分を見失い、笑いのあとにくるしっぺ返しが、不幸を招来するとも思っているのだろうか。

竹林のなかの細い道を歩く。

静かだ。

竹の一本一本がまっすぐに伸び、暗い雨空を槍のように突き刺そうとしている。

「ちょっと、待って」まりもが道端に屈み込んだ。

「どうしたの？」僕が近づくと、「こんなところに……」とまりもが指を差す。指の向こうに三十センチほどの古ぼけた板が立っている。墨の字は薄く消えかかり、「の墓」と読める。まりもは眼をつむり合掌すると、すぐに立ちあがり、背を丸めて歩き始める。

竹林は次第に切れ、左手に白い壁が瓦をのせて先へと続いていった。

湿った黒い土。

まりもは静かに歩く。足音がしない。

広い道路を渡る。砂利道に出る。

疎水の流れに遡って歩く。

寺の門をくぐる。紅葉がきれいだ。

雨に濡れた小犬が尻尾を振って、まりものスカートに飛びかかる。まりもは悲鳴をあげ、半回転する。住職に呼ばれた小犬はまりもから離れる。

寺から寺を歩く。

静まり返った風景。

灰色の空……

*

秋の終わりを告げるような風がどこからともなくやってきて、街並みを掃いた。冷たい道路にうずくまっていた紙屑は、煽られ、仕方なく坂道を転がって行った。風は反転すると、アパートの窓から見える小さな木立を揺るがした。

階下で電話の呼び出し音が鳴っている。管理人の声がした。僕は階段を駆け降りる。

「お父さんが死んだの！ 自分から死んじゃったの！」

まりもが電話口で泣き叫んだ。

まりもの父はダンプカーとぶつかり即死した。

肌寒い早朝、近くに住む老人が見ていた。信号が青から黄色にかわると、まりもの父はゆっくりと歩き出した。広い横断歩道の真ん中で、まりもの父はなにかを考えるかのよう
に空を見あげ立ち止まった。十一月の薄い光が、その姿を浮かびあがらせ、静寂が息を凝
らしていた。突如、地の底から躍りあがるようにダンプカーが迫った。まりもの父は、ち
らっと顔をダンプカーに向けた。「避けようと思えば避けられていた」と老人は言った。
だが、まりもの父はその場から動こうともせず、じっと立っていた。そして、あること
か迫ってくるダンプカーのほうへ、一歩踏み出したのだ。「あれは自分からダンプカーに
当たりに行ったのだ！」老人は声を震わせて、何度も言ったそうだ。

四か月のうちに、僕の近くでふたりの人間が死んだ。ひとりの子供で、ひとりは大人だ。
一週間が経った日曜日、僕はまりもを訪ねたが、家の周りをぐるぐる歩いただけで帰って
きた。

まりもの父がなぜ自殺をしたのか、僕にはわからない。小説家からだろうか？ そうで
はないだろう。四十五年間生きてきた男にとって、自分から人生を終わらせるといふこと
は、なにを意味するのだろうか。これ以上生きていても仕方がないと思ったのだろうか。日
常の繰り返しだが、反吐が出るほどに鼻についたからなのか。

一度だけ、まりもの父親と会ったことがある。

駅前の喫茶店でまりもと逢っていたとき、ひょっこりと父親が店に入ってきた。白髪で、
背が高く、驚くほど痩せていた。ヘビースモーカーらしく、ひっきりなしに煙草を吸って
いた。僕の歳を訊いて、二十三だと答えると、「そうか、生まれてまだ二十三年か」と大
量の煙を鼻から出した。まりもと同じように口数が少なかった。だいぶ時間が経って、ま
りもの父が重い口を開いた。

「まりもはねえ、小さいころから感受性の人一倍強い子で……あれはまりもが五歳のと
きだった。私と家内、まりもの三人で近くの川へ遊びに行ったときだ。川辺には丈の高い
雑草が生い茂り、汀がわかりにくく、私が草をかき分け川沿いに進むと、うしろから家内
が『あなた気をつけて、川に落ちて死んでしまいますよ』と声をかけてきた。私は大丈夫
だと言いながら、なお前へ進んだ。そのとき、『パパ駄目！ 死んじゃう』と、まりもが
怯えたように泣き叫んだのだ。まりもの切迫した声に驚き、私は草むらから離れるとまり
ものそばへ近寄り、『大丈夫だよ、パパはそんな簡単に死なないよ』と頭を撫でた。まり
もは気が静まったのか、『パパ、危ないですよ』と大人びた口調で私の顔を見あげた。五
歳の子供に死の意味などわかるはずもない、母親の言葉をまねて言ったのだと思った。し

かしあとで考えてみると、どうもまりもは、死の意味を先天的に理解しているのではないかと思つた。あの差し迫つた叫び声は、とても母親の口まねで言つたものだとは思えない。死がもたらす欠落感の恐怖が言葉のなかに込められていたと、私は今でも思つている」

まりもの父は、遠く過ぎ去つた日の、川のほとりの情景をまのあたりにしているように、眼を細めて宙を見つめていた。

まりもはその話を初めて聞いたのか、「そんな……」とつぶやくと、僕のほづを見て顔を赤くした。

「君、四十にして惑わずという言葉、知っているね」

父親はまりもを無視して僕に言った。

「あれは、四十になつたら人生を迷わなくなるという意味だと思つたろう。違つね、本当の意味は四十になつたら大いに迷つから、心を空虚にしてやり過ごせということだよ。四十歳というのは中途半端な年齢でね、過去と未来の狭間に立つてどちらへも動けない。そしていま立っている場所はなんなのか、そもそも出発点が間違つていたのでは、と考えるのだよ。その覚醒は辛いね。今まで生きてきた全てを否定したくなる……」

僕は急にしゃべり出した四十五歳の男の顔を、あらためて眺めた。その僕の表情を見て、まりもの父は突然笑い出し、伝票をつかむと出て行つた。

「変なことを言つお父さんだわ……」

まりもは父親のうしろ姿を見送つて、そうつぶやいた。

*

日常のなかを、僕は低空飛行を続けていた。

まりもと水曜日の夜と土曜日に逢う以外、僕は仕事が終わるとまっすぐアパートに帰つた。もともとひとづきあいの苦手な僕は変わり者で通つていたし、必要なことのほか誰も話をせずどこへも行かなかつた。夜は耳栓をして独り静かに本を読んだり、ぼんやり壁や窓硝子を見つめて物思いにふけた。

まりもと逢えない日曜日、僕はアパートの近くの公園で一日を過ごす。その公園は三つの角を持っていたので、近隣の人たちから三角公園と呼ばれていた。

僕はいつもの決まつたベンチに座ると、蘇鉄の木を見あげたり、砂場で遊ぶ子供らの様子を飽かず眺めた。背中から聞こえてくるJRの発着音以外、公園はひっそりとしてい

た。遊動円木やブランコは初冬の陽射しを受けてじっとしている。長い髪を波打たせ、公園の入り口のすぐ横にある公衆電話に、女子学生が駆け込んだ。数分後、赤い手帳を片手に、今にも泣き出しそうな顔で電話ボックスから出てくると、小走りに駅のほうへ向かった。

公園の周りには八台の車が違法駐車している。四角いコンクリート柱の上で、時計の針が左へ左へ少しずつ移動していく。眼の前を数羽の鳩が歩いている。一羽、二羽、三羽……、全部で十四羽の鳩だ。一羽の鳩が小さく飛び立つと、続いて二羽の鳩が飛び立ち、左横にある鉄棒の下をよちよちと歩いていく。

僕の足元で煙草の吸殻が十二本になった。時計の針の進行とあいまって、空虚な気持ちに重さが増え、じりっじりっつと落ち込んでいく。やがて胃液で意識が融け始め、僕の脳は空っぽになった。子供を叱る母親の声で、僕の大脳に再び血液が流れ始める。消したはずの吸殻の一本が、かすかに煙を上げ、しぶとく燃えていた。

三角形の底辺の部分が大学の裏門と隣接していて、学生たちは車の多い道路を通らずに公園の中を道がわりに通る。その学生たちを見ながら、いつも僕は一体なんのために生きているのだろうか、自問自答を繰り返していた。

「あなたって、奇妙な生き物ね」と、まりもは僕に言ったことがある。「そうかも知れない。けれど、君だって」僕は苦笑いした。まりもは、そんな僕の言い方がほど可笑しかったのか、声を立てて笑った。

今はいない資料課の主任は、僕を会議室に呼び、「君の存在を示せ」と言った。存在を示せ？ どういうことだ？ 百八十センチの長身で顔はキツネのように細かった。主任は、「ソンザイ」とは言わず、「ソンザイ、ソンザイ」と言った。老けて見えたが二十八歳だった。中学を出てすぐこの工場へ就職したと言っから、十三年間勤めて主任になったわけだ。奥さんは製造課の人で、歌手の小林幸子に似ていた。主任は奥さんのことを、さっちゃん、さっちゃんと呼んでいた。資料課の何人かと新婚家庭というのを見せてもらったことがある。寝室の大きなベッドと花柄のカバーが印象的だった。その幸せそうだった主任が、結婚してから四か月目に、スナックの女と駆け落ちをして姿をくらました。さっちゃんは長い間工場を休んでいたが、自殺をしそくなって入院しているという噂だった。それにしても、人間とはよくわからない生き物だと思った。

公園には誰もいなくなり、冷たい風が吹き始めた。僕はいつも行く中華料理店へ入った。焼き飯とラーメンを注文する。焼き飯を食べていたとき、急に鼻血が出た。僕は食べるの

を中断して上を向いていた。周りの客がいぶかしげに見たり、くすくす忍び笑いをしているのを横目で見ながら、なぜこんなときに鼻血が出るのか？ と僕はとまどい無性に腹が立った。ウエートレスが気づいてティッシュペーパーを持ってきてくれた。僕はティッシュを二枚抜き取り、左の鼻の穴に突っ込んで焼き飯の続きを食べた。……鼻血は、なぜいつも片方の鼻孔からしか出ないのか？僕は冷めたラーメンを半分ほど残し店を出た。

*

まりもと僕のが資材課で噂になり始めた。ベルトコンベアの横で、長髪の三人の男たちが顔を突き合わせて話をしている。僕を見るとうすら笑いを浮かべた。僕は知らぬ顔で通り過ぎた。

「あいつ、あの女と付き合っているんだって。二年前のこと、誰か教えてやれよ」

古顔の男の声が僕の耳に入った。

昼前のことだった。僕は製造課への出庫を早く終え、トラックから運び込まれた新たな部品を入庫していた。部品を各棚へ収めていく。一年前に入った二十二歳の男は、眼鏡を光らせながら出庫を続けている。ようやく終わったのか、男が僕のそばへ近づいてきた。

「あんた、製造課の白井っていう女と付き合っているのか」男は僕の顔を下からのぞき込むように言った。「あの女の、二年前のこと教えてやろうか。 、 。 なっ」と

耳元でささやいていやらしく笑った。「それがどうした、お前になんの関係がある」僕は低くうめくように言くと男をにらんだ。「なんだと！」突然男に肩を突かれよろめいた。

僕は咄嗟に体勢を立て直し身構えた。「やるのか！」男は眼鏡を棚の上に置くと、いきなり殴ってきた。僕は上体をひねり男の拳をかわした。にらみ合ったとき、身体中の血液と血液が脳に流れ込み、頭が割れんばかりにうずいた。頭髪が逆立ち、僕は全身を震わせた。長髪の男は口をゆがめて笑っている。男が一步、二歩前に出てきた。僕は右の拳に全体重をかけて、男の鼻頭へ打ち込んだ。「うっ」と男はうめき、よたよたとうしろへよろけると部品棚へ背中をぶつけた。鼻のあたりを手で覆っている。指の間から血が流れていた。男は手についた血を見て呆然としている。二発、三発立て続けに男の顔を殴った。驚くほど大量の血が鼻から吹き出し、男の口から顎を真っ赤に染めた。男はうずくまり両手で顔を押さえている。その指の間から血があふれ、コンクリートの床に流れ落ちた。僕はなおつづくまった男の頭部へ拳を打ち込んだ。すさまじい怒りが僕の身体の奥底で爆

発し、そしてその熱波は怒濤の勢いで脳内を駆けめぐり、僕は憎悪の鬼と化して男を殴り続けた。

「やめろ！ それ以上殴ると死んでしまうぞ」

誰かが僕の背中中で叫んでいた。背後から両腕を羽交い締めにされた。騒ぎを聞き駆けつけた二人の男たちが間に割って入った。長髪の男は抱きかかえられ、医務室へ運ばれて行った。

「こんなに大量の血を見たのは初めてだ。あいつ、よほど血の気が多い奴だ」

コンクリートの床に流れている血を見て同僚が言った。

赤ら顔の班長に呼ばれた。「あまり、無茶をするな」班長は呆れたように首を振ると、僕の顔を不思議そうな眼で眺めていた。

雨の上がった空は、灰色の雲が幾重にも重なり、どんよりと鬱屈していた。旗を下ろされた銀色のポールが二本、暗い空に突き刺さっている。ところどころに雨水が、へこんだコンクリートの上で鈍い光を放っていた。

僕とまりもは、その水溜まりを避けながらコカコーラの赤いベンチに座った。生臭い風が林立するビルの向こう、霞んだ山々の頂上から吹きつけてくる。

「わたしたち……」

まりもは風で顔を覆う髪を、片手で払いのけながら言った。

「わたしたち、出会うのが遅すぎたのよ。あと、二年早く会っていればよかったのに」

「なぜ、そんなことを言う？」

僕はやりきれない腹立たしさでまりもに言った。また自分ひとりで考え、思い詰めていると思った。

木馬もコーヒーカップも停止していて、黄と白の色はくすんで見えた。まりもは僕と別れたいのだろうか？

「わたし、あなたが考えているような女ではないわ」

僕は黙っていた。デパートの従業員が僕らのほうを見て通り過ぎた。僕は二年前のまりもを知らない。それはどうだっていいことだ。まりもが工場内の何人かの男と、性交渉があったとしてもだ。僕はまりもに、なにかひとと違ってやればよかったのかも知れない。けれど、僕は黙っていた。どう言ってよいかわからなかったからだ。

「あなた、きつとわたしから離れていくわ。でもいいの、わたしが悪いのだから」

鈍い軋む音を立てて木馬が回り出した。沈んでは浮きあがり、スピードを上げていく。《夜更けの繁華街を僕はさまよっていた。二十一歳のときだった。欲望の質を色にしたら、こつたと言わんばかりに赤や黄のネオンがキラキラと輝いていた。人が絶えるまで、その店の前を行ったり来たりしていた。人が絶えた隙を見て、僕は早足で店の中へ入った。「いらっしやいませ」受付の男が言った。「ご指名は？」僕は首を横に振った。待合室では数人の客が週刊誌を読んだりテレビを見て順番を待っていた。係の男が番号札と茶を持ってきた。僕は顔を上げずにうつむいたまま番号札を受け取った。順番がきて僕の番号が呼ばれた。エレベーターの中で女が待っていた。扉が閉まった。ぎこちなく立っている僕を見て女は、「初めて？」と言った。「二十五六ぐらいの歳だろつか、僕はうなずいた。ふっと女の顔に笑みが浮かんだ。がすぐに消え、真面目な表情で僕を見つめた。そのあと、僕は何度かその店へ行った》

まりもがベンチから立ちあがり、うなだれて歩いて行くのを僕は慌てて追っかけると、まりもの腕をつかんだ。まりもは泣いていた。

港の見える公園に行く。海は荒れていた。風は細い喉元から絞り出すように嗚咽していた。

数時間、僕とまりもは船を見つめていた。

身体が冷えきって、僕とまりもは武者震いをするかのように震え出した。

公園を出る。雨が降り出してきた。まりもの小さな傘のなかで、濡れる肩。光の欠片すらない暗い空。暗闇のなかほどから白い大粒の雨が滝のように落ちてくる。アスファルトの路面にはじけ、ズボンの裾が重く濡れそぼる。まりもは立ち止まり僕を見つめる。「もう、帰らないと……。バスの時間が」口をすばめて言っ。水しぶきを上げて駅までの数十メートルを走る。まりもが声を上げる。肩で大きく息をつくまりも。湿っぽい空気が身体にまとわりつき、僕は身震いをする。明るい構内につごめく人の群れ。僕とまりもは、このなかでは場違いな闖入者のように思われた。階段を駆け降りるまりも。途中で突然振り返り、眼を見開いて僕のほうを見る。「早く、行くんだけ！」僕は喉の奥でまりもに叫んだ。長い髪が一瞬ひるがえり、まりもの姿が消えた。

僕はやさしさを表現するすべを知らない。まりもの悲しみを受け止めてやり、僕が半分加担してもよいのだ。心はそう思っても言葉や身体は反対の行動をとる。まりもは僕にとって唯一、他人ではない他人なのだ。自分と他人との間の人間、原初の記憶を共有している他人、そんな気がするのだ。

まりもには、遠いふるさとの匂いがあった。まりもは幼児期の癖をそのまま引き継いで大きくなったようだ。しぐさのひとつひとつに、幼いころのまりもをほうふつとさせた。暖かくなれば旅行に行こうと、僕はまりもに提案した。僕の話をまりもは嬉しそうに聞いていた。その顔がまぶたから離れない。

朝、いつものように僕は工場まで走った。更衣室から出ると、融けた雪でアスファルトの道が濡れていた。製造棟の工事中の白いテントシートが、風ではためきめくれている。ラジオ体操の時間が近づき、ぼつぼつと更衣室から人が出てきた。突如、細い悲鳴が聞こえた。その声のほうを見る。工事中の白いテントシートから、灰色の物体が落下していく。それはゆっくりと半回転して、黒いアスファルトの路面に叩きつけられた。長い髪が孔雀の羽根のようにひろがった。近くにいた作業員たちが駆けつける。まりもはよろけながら立ちあがると、白い製造棟の壁に両手をついた。そして壁を伝うように、少しずつ歩いた。だが、数歩も行かないうちに、崩れるようにその場に倒れ込んだ。僕は走った。まりもを抱え起こす。まりもは青ざめた顔をして、眼を閉じたままだ。僕はまりもを抱きすくめる。まりものあたたかな身体の温もりが、僕の身体に伝わり、僕の口から言葉にならない叫びがほとばしり出た。

サイレンの音。救急車が工場の裏門から入ってきた。まりもは担架に乗せられ、車内に運び込まれる。扉が閉められ車が走り出す。僕は追いかける。サイレンの音。まりもを乗せた車は、スピードを上げる。僕はそのつしろを走る。「まりも！」僕は叫び、車に手をかける。濡れたアスファルトに滑り僕は転ぶ。立ちあがり追いかける。雪が舞っている。灰色の空が回っている。救急車はどんどんスピードを上げ、僕から離れる。工場を出て行く。次第に遠く小さくなる……

僕とまりもの関係を、なんと呼べばいいのだろうか？ 恋人同士、そう恋人と呼んでさしかえない。性的なものが介在しない純粹無垢な恋人同士。それにしても、まりもは僕のどこを気に入っていたのだろう。若さもなく、現在から未来を黒く塗りつぶそうとする僕の生き方。まりもは、まりも自身も気づかない無意識の奥底のどこかで、僕の病の正体を

悟っていたのかも知れない。

僕らの交際は結局、暑い夏に始まり冬のさなかに突然に途切れた。まりもの不慮の事故死によって。ラジオ体操に遅れまいと、一階の製造棟の工事中の階段を降りようとして……。

「まりも、ラジオ体操なんてどうだっていいんだ」

生真面目なまりも。なぜ、まりもは死んでいったのだろうか？　なぜ、二十一歳の若さで……

僕は、まりもにさよならと言っべきか。だが死んでいった者に対して、さよならとはなんと意味のない言葉だろう。生き残った者には思い出が残り、死んでいった者はなにも持たずてゆけない。まりもの生は中断されたまま、消滅してしまった。過去も未来も置き捨てて、現在という時空の一瞬の裂け目に呑み込まれ、どこかへ行ってしまった。

「あなた、わたしの死を望んでいたでしょう」

まりもの声が、降りしきる雪の空から落ちてきた。

まりもが亡くなってから一か月後に、僕は工場を辞めた。二月の底冷えのする日、細い烟道を歩いた。いま、白い建物の中では、リフトやベルトコンベアが部品を運んでいるのだろう。正面から吹きつけてくる風に、僕は立ち止まり顔をそむけた。まりもの姿が、抜けるような青空に浮かんだ。しかしはつきりとした輪郭で像は結ばず、白い顔のなかに大きな瞳だけが光って見えた。僕は工場に背を向けると、もう立ち止まり振り返ることをせず、駅への道を急いだ。

*

一冊の大学ノートに遺された息子の手記は、ここで終わっている。

息子は、白井まりもが亡くなった一年後の同じ冬の日の朝に、独りアパートの殺風景な部屋で死んでいた。

息子は白井まりもの事故死を契機に工場を辞め、新しく生まれ変わろうとしていたのだが、しかし彼は、生き延びることを選ばず死を選んだ。それも、餓死という彼にふさわしいやり方で。

十二歳のとき、ひとりの少年を水死させたときから、彼の死への伏線はあったのかも知

れない。それにしても、息子の周囲にはあまりにも死が充満していた。肉体を鍛えることによつて、彼は再生を試みたが、皮肉にもその肉体を削ぐことにより、死に至つた。息子はなんのために、この世に生まれてきたのか？ 少年期、辛い環境のただなかに住まわせた息子に対して、私は自責の念で気も狂わんばかりだ。だが、彼の死に顔は、その私の思いを峻拒している。孤絶感を漂わせた彼の肉体は、誰の同情からも遠く隔つて虚空にそそり立っている。

ノートの最後に、彼の詩を認めたので、次に掲げる。

ある朝

独りの少女が転落した

アスファルトの路面に赤い血が流れ

ラジオ体操が凍りつく

ぼくの吃音と青い吐息が冬に触れ

朝が融け出す

無数の朝の死骸は運河にうねり

河口へ……

午前は死んだか？

工場の門扉をひらき

悪意の照り返す午後のただなかへ

ぼくは走り出る！